

## 『経絡明弁』について

鶴田 泰平

日本鍼灸研究会

『経絡明弁』(写)は藤原武臣の校、高生徳の記による、江戸中期の医家・中島元春(本書中では玄春)の著した『苻苳解』(現在は佚亡)について、「驪忠先生」(目黒道琢)が要訣を挙げたものを記述したとする、宮本春仙流を受け継ぐ元春の経絡経穴学および鍼灸医学に関する書である。京都大学付属図書館富士川文庫所蔵(シ・136)、『経脈方寸秘書』に合綴されている。外題は「苻苳経絡明弁」、内題は「十四経骨度明弁」。成書年と書写者は未詳であるが、書中の「鍼術秘訣口授」の末尾に「寛政九丁巳年[1797]七月十四日」「文化八辛未年[1811]二月十六日」の日付の列記のあとに「平岩隆庵謹書」とあり、また、後述の(4)には通常の「按」のほかに「方円曰」「方円按」が、末尾には「高階玄意志礼莊敬正之」の記述がみられる。

中島元春(生没年未詳)は号を東嶺と称し、水戸の鍼医・宮本春仙の学統に属し、その学術をのちの考証医家・目黒道琢に伝えた。元春の医学を今に伝える書としてはほかに、藍川玄慎校訂の道琢の遺稿『参攷揆穴編』(天保十年[1839]成立)、小坂元祐著『経穴纂要』(文化七年[1810]序刊)、井岡冽纂述『揆穴資蒙』(天保六年[1835]成立)などがある。

本書の構成と体裁は、(1)序文、(2)「骨度篇」(『靈枢』骨度篇をもとにする)、(3)「定大椎伝」、(4)経絡別の穴位、(5)「一次脈任脈側之動脈」～「七次脈」(人体の動脈拍動部による診脈部位か)他、(6)「鍼術秘訣口授」(10項目)、(7)「八窞穴主治口伝」、(8)「風市」、(9)十四経の経穴の総数論(『素問』気府論、気穴論、『苻苳解』、『(医学)入門』の比較)、(10)「期門穴」、(11)「術日癩病」、(12)「目赤痛從内眦起」、(13)治腰痛論、(14)「汗法」、(15)「九脈之会」、(16)「因生年忌鍼灸月之事」、(17)「癩瘻日忌鍼灸事」、(18)「血忌日鍼灸事」、(19)「逐日人神之訣」、(20)「十二時人神之訣」、(21)「尻神歌訣」、(22)「九宮尻神歌訣併順飛之全図」、(23)「十干日不宜用針犯之病多反覆慎之」、(24)「知死期時口訣」、(25)「五臓死脈之訣」、(26)「真臓死脈之訣」、(27)「諸病不治証口訣」、(28)「婦人脈法併妊娠候法之訣」、(29)「小児脈法」、(30)「諸病宜忌脈法」、(31)諸病の灸治法の31項目によるが、(8)(10)(11)(12)のように中途に前後との脈絡なく病症論や治法、経穴の主治病症が挿入されるなど、多少の混乱が見られる。また、本書の全般において、記述や論述の典拠となる書名や人名が記されている。

このたびは、宮本春仙から多紀元孝、中島元春、目黒道琢、藤井貞三、大膳大夫良益、小坂元祐へと繋がったとされる経穴学の系統とその内容を考察する手掛りを得ることを目的として、『経絡明弁』の内容とその典拠の調査、宮本春仙の経穴学を伝える他の書物との比較検討を行った。